

## 第八章 わたしたちの負い目を赦してください

主よ、

わたしたちを牢獄に押し込め、拷問に追いたてる者たちを目のあたりにされる時、そして、看守たちの無残な行いと、

裁判官によって課せられるわたしたちへの重刑について思いをめぐらされる時、さらに、わたしたちを憎悪する者たちの生に、わたしたちを拒絶する者たちの良心に審判を下される時、

どうか、主よ、彼らが犯した悪をお赦しください。

十字架にかけられた御子のお側近くにひき寄せられるのはむしろ、犠牲を払うことによつてなのです。

拷問にかけられている時、わたしたちは御子の苦しみを理解します。

刑に服している間、御子の魂の自由を思います。

懲罰とおして、神の国に対する希望を強めます。

そして屈辱を受けて、わたしたちは、御子のこどもたちであるという喜びを得るのです。

主よ、ご記憶ください。

わたしたちの苦難は、わたしたちの中で

押しつぶされ、砕かれた種子を発芽させ、

正義と平和の果实を実らせ、

光と愛の花を咲かせるのです。

しかし、主よ、特に心に留めておいてください。

わたしたちは、決して彼らのようになりたいとは思いません。

彼らがわたしたちにしたことを隣人たちにしたいとは思いません。

ブラザー・フェルナンド、ブラザー・イヴオ、ブラザー・ベット “囚われ人の祈り”

「火刑壇からの歌」 Petrópolis, 1977, p. 346.

われわれは、生きるにあたって、確かにパンを必要とするとはいえ、パンのみによって生きるものではない（マタ四4）。人はパンという、必要最低限の基本物質（食物）を欠いては、存在することも、生き延びることもできないわけであるが、それと同時に、社会的組織、関係とも密接な結び付きを持って生きている。換言するなら、社会的関係もまた、人の生に不可欠な存在なのである。この点で、人間は単に生きるというだけではなく、共に生きている、「共存」しているのである。ここにおいて人間は、人格ある個人として登場するところとなる。すなわち、他者と結びつくことの出来る者、「他者」に耳を傾け、提案し、応答をなし得る者、そして、責任という観念を持っている者のことである。

ある個人について語るといふことは、その人物の関係、結びつき、同盟を語るといふことであり、それらは、その人物を、他者に対して責任を負う者、彼らに義務を果たし、あるいは義務を破り、他者を幸福にも不幸にもする者としてしている。一個人は男であれ女であれ責任ある存在であるが、そのことは又、神の愛に応答するにしろ、これを拒絶して狭い殻の中に閉じこめるにしろ、神に対してもまた責任を負う存在であるといふことである。良心とは、人が「他者」および、神の声を聞く場所である。そして、人間は、自由に心を開いたり、閉ざしたり、責任を受け入れたり、拒否したり、できるのである。

## 罪の体験と負い目

対象が神であれ、ほかの人間であれ、自分と他者との間に結びつきが生じると、多様な態度が生じてくる。それは、愛であったり、友情であったり、同情、協力関係であったり、冷淡な態度であったり、逃避や不面目、傲慢、搾取、であったりする。この態度には、中立といったものはない。人はいずれかの側に身を置かざるを得ない。関わりの様々なレベルにおいて人は同調するか対立する。人間のエゴ（自我）というのはつねに、他人と共に生きる場において、また他人に関わる際に、その何たるかを明らかにするのである。

この相互関係の世界の中で、人は、他人に対する恩義や負い目を感じ、時に人間同志で傷つけあったり、罪を犯しあったりする。われわれは他の人々に負い目を感じる。われわれは生まれることを頼んだわけではない。しかし誕生したわれわれを迎え入れてくれる人びとがいた。彼らはわれわれに、食物を与え、世話をやいてくれた。それは健全な生に不可欠なものであるが、非常に多くの人々はそれを拒否され、無きが如きものになっている。

信仰厚い人びとは、神との関係でも類似の体験をする。彼らには、この世における生、健

康、衣類、頭上を覆う屋根、知力、生きる意志、友人、その他数多くの価値あるものが与えられている。これらはすべて生命の一部であり、人間の才能がいかにすぐれているようにとも、人間自身の力に頼るだけではけっして獲得されないものである。人は、これらをすべて父からの贈物として体験するのみである。そのときわれわれは、自分たちを恩を受けている者と実感し、ごく自然に、感謝の念がこみあげてくる。この恩義、負い目の感情は、無垢の負い目と呼んでよい感情であろう。これは、ある意味で返済不能となっている負債である。われわれはいかに知恵を働かせようと、汗水をたらそうと、われわれに生を与えてくれた存在に（それが神であろうと、あるいはこの世の父母であろうと）、われわれの負債を返すのは不可能である。<sup>(94)</sup>これにあてはまる福音書の一節がある。どんなに沢山感謝に値する行いをなしたとしても、われわれは結局しもべなのであり、そうした行いは名譽に価しない。われわれはただ、自分のしなければならぬことをしただけである（ルカ一七10）。

しかし、こうした「無垢な」負い目とは違う、罪の負債というものが存在する。これは、罪に起因する負債であり、償いを求められる性質のものである。われわれの良心は、コミュニケーションを損なったり、愛を傷つけたり、人間性そのものを損なっている人間関係について罪悪を感じる。この罪が罪として認識されるためには、人の他人との関係、神との交流という関係が前提されている。しかし、なすべきことがなされなかった。隣人たちは私に彼らを安心さ

せる言葉を求めたのに、私はその言葉を拒んだ。隣人たちの姿は私の憐れみをさそったのに、私は薄情になり、彼らをはずかしめた。貧しい人々が私に彼らの苦しみを語り、助けを求めて手を伸ばしているのに私は通り過ぎた。子供の悲しげな目が空腹を訴え、やせ衰えた栄養失調の母親の腕の中で、幼子が熱を出して震えているのに、私は落着きを失うまいと顔をそむけた。他にも嫌悪すべきことがある。弱者や雇い人や、無知な人を搾取したり、邪魔者を抹殺したりということ。交わりは壊れて、人間性は侵犯されている。不正と恥辱がある。兄弟姉妹は対立している。そして神もまた被害をこうむられた。なぜなら神が喜ばれるのは、慈しみと、愛と正義と連帯であるが、これらがすべて踏みにじられているからである。

先に述べたような悪しき行為は、単に法が破られたというだけでは完全に説明しきれない。掟は私に、私がしてほしいと願うことを他人に施せと命じているが、私はそうしなかったのである！ 抽象的な法に向き合ったとき、われわれは実際に罪の意識は持たなくても、たいていは残念に思い、後悔するものである。しかし先に述べた行為というのは、人と人の関係における暴力であった。尊厳が傷つけられ、要求が踏みにじられたのは、単なる法ではなく、「人格」である。すなわち人間同志のつながりが破壊されたわけである。言うまでもなく人間相互の連帯、神ご自身との関係が打ち砕かれたのである。この罪は、われわれが神の呼びかけを感じ、その後それを拒絶したのだと説明すれば、最も明確に理解され得るであろう。神はわれわれ全

体に呼びかけ、要求するのではなく、われわれ個々人の良心に訴えてきている。神の呼びかけはわれわれが存在を傾け、応じることを要求している。忠誠、人格の発展と成長が呼びかけられているのに、注意が払われない。われわれの管理に委ねられた財産は、ただ埋められて、も  
うけを生んでいない（マタ二五14～30参照）。

われわれの誰もが、心にとがめを感じる体験を持っている。おかされた罪が自分に直接関係することではないのに、やはりとがめを感じるといった経験がある。そんな時、われわれは負い目を感じ、許しを求めねばならないと感じる。こうした心の負担は、精神病や強迫神経症ではない。そのような精神異常の場合には、罪は実体がないものであり、だからこそ異常を作り出すわけである。しかし先の体験は、むしろ破壊されていた人間関係を回復するため、正されるために必要な健康度をはかるものなのである。<sup>(95)</sup> 全ての人の意識の底には自分たちの人生で全てのことが正しいのではないという思いが根づいている。すなわち「わたしたちは皆、度々過ちを犯す」のである（ヤコ三2）。われわれは誠実であらうとするなら、自分が罪人であることを認めなければならない。「自分の罪がないというなら、自らを欺いており、真理はわたしたちのうちに」はないのである（一ヨハ一8）。そしてこの罪は、支払われるべき負債として、良心によって感知される。聖書にはしばしば、主よ、われわれに慈悲をお与え下さい！ といった自発的な嘆願が示されている。「深い御憐れみを持って、背きの罪をめぐって下さい」（詩

五一3)。そして、詩編作者は良心の痛みに耐えかね、次のように叫んでいる。「御覧下さい。私の貧しさと労苦を。どうか私の罪を取り除いて下さい」(詩二五18)と。シラは、われわれの罪を許してもらうための最善の方法は、われわれに罪をなした人びとを許すことであると述べている。「隣人から受けた不正を赦せ。そうすれば、願ひ求める時、おまえの罪は許される」(シラ二八2)。そして、イエスもまたいたって単純明快に、「赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される」(ルカ六37)と述べている。

この相互に赦し合う可能性からきわめて遠く、われわれは常に、負い目の意識をいだいている。これは単に、罪ある態度を絶つとか、悪しきおこないに対して償いをするということでもない。罪とはもっと根の深いものであり、われわれの全存在にしみわたっているものである。われわれは、罪の渦中に生きている。あるいは、われわれの呼吸する、生命の源である空気そのものが、神による久遠の恩寵、慈悲の存在にもかかわらず、汚染されてしまっているのである。<sup>(96)</sup>それゆえにわれわれは、悪の力の犠牲者であるという思いから容易に逃れることは出来ない。この悪の力が、時にわれわれを罪に追いやり、友愛の絆を絶つおこないに駆り立てるのである。これは、正されるべき過ちという性質のものではなく、改められ、更新されるべき状況と呼ばれてしかるべきものである。つまり新しい人となって生き返らねばならない。このことこそ御父の恩恵、赦しの体現者であるイエスのメッセージが真にわれわれを自由にする点であ

る。つまり、イエスは「子よ、あなたの罪は赦される」(マコ二五)と述べている。イエスの「福音」には、救済や新しい天地の創造だけでなく、人間の負う負債の完全で根源的な返済、すべての罪の最終的な赦しというものも、含まれている。

わたしたちの負い目を赦して下さい

以上の説明は、主の祈りの五番目の願い「私たちの負い目を赦して下さい、私たちも自分に負い目のある人を赦しましたように」を理解するためであった。この願いは、絶望的なまでに罪深い人類の叫びであり、これはほとんど悲嘆といってよいものだが、無限の慈悲と恵みを持った父に向けられた叫びである。

この部分は、マタイによる福音書とルカによる福音書では微妙な違いがある。マタイによる福音書では、「不正」あるいは「負い目」は商売の世界で用いられた(負債)から取られた表現であるが、時の経過とともに宗教的ニュアンスをまとって「罪」の同意語となった。ではこの「罪」とは何かというと、これは罪の個人的な性質を強調している。既に述べたように、単に規則を破るだけでなく、どの人、どの人間関係にもおられる神を伴っている人間の関係を破壊

することでもある。ルカによる福音書は、この個所を「(そして) 私たちの罪を赦して下さい。私たちも自分に負い目のある人を皆赦しますから」(一一四)と述べている。ルカは「不正」や「負債」を「罪」と言い換えているわけであるが、これは、読者層であったギリシヤ人に理解しやすくしたためであった。セム族の間でこそ「不正」「負債」が宗教的な意味を持っていたものの、ギリシヤ人たちの言語では、そうした連想が全く働かなかったからである。しかし、この嘆願の後半になると、ルカは「わたしたちに負い目のある人」という表現を用いて、そこからわれわれは「罪人」すなわち「われわれに対して罪をおかした人々」と理解できるのである。このことは、マタイによる福音書の方が、ルカによる福音書よりも古いことを再確認させる。

さらにわれわれは、イエスによって宣言され、実践された、神の赦しという良き知らせについて、考えをめぐらせてみる必要がある。このことが主の祈りのこの部分の嘆願が発せられる背景なのである。

イエスの宣言は、新しい天地が、まさに出現しようとしている、そしてそれによって、全体の世界的な解放が進んでおり、その完成に至ろうとしているという喜ばしい知らせだけを強調しているわけではない。すなわち「良き知らせ」(福音)を「良く」「幸福な」ものとしているのは、この知らせを最初に耳にした人々が、貧しい者、弱き者、社会の底辺や辺縁に追いやら

れている者たち、罪人たちであったということなのである。イエスが証言する御父は、「恩を知らない者にも悪人にも、情け深い」(ルカ六35)、無限に善なる存在である。そしてこの父は、迷える羊の神であり(同一五1-7)、失われた一枚のコインの神であり(同一五8-10)、放蕩息子の子神なのである(同一五11-32)。父は、悔い改める一人の罪人を悔い改める必要のない九九人の義しい人以上に喜ばれる神である(同一五7)。

父のこの慈しみをこの世において体現するイエスは、やはり慈悲深く、恵み深い存在である。彼は、人びとに説教する通りのことを実践する。「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深いものとなりなさい」(同六36)。それゆえにイエスは罪人の家を訪問されたのである(マコ二15、ルカ一九1-9)。そしてイエスは、罪人の仲間と見なされた(マタ一一19)。これは単に人道主義者の行為というだけのものではない。イエス自身による慈悲深い神の体験があつてこそその行為なのである。イエスは自らの行いを通じて罪人たちに、単に罪人だからという理由で父の愛から除外したりしないこと、父はむしろ、無限の優しさで彼らを愛しており、彼らもそれゆえに父の愛のもとに戻れるということを感じさせるのである。父は間違ひなく腕を広げて罪人を受け入れ、赦しの接吻を与えるのである(ルカ一五20、サム下一四33)。

この慈悲の福音は、イエスの時代の宗教家たちを悩ませつづかせるものとみなされただけ

ではなく、現在においてもこれに憤慨するキリスト者が存在しつづける。また、一部の熱烈なキリスト者は、主の道を外れることなく歩もうと努力し、この厳格な努力ゆえに、自分たちこそ神によって愛される唯一の集団であると思い描く。しかしこうした態度は、弱者や誤りをおかした人びとを過酷に扱ったファリサイ派の人々と同じものに彼らを変えてしまう。赦し、あるいは慈悲を扱っているイエスの主要な教えは、主として、罪人たちに対してではなく、信仰深い人びとに、そしてイエスと父のものの惜しみない寛大さを批判する人びとに対して向けられている。罪深い女が彼の足に接吻し、香油を塗るのを許す（ルカ七36～50）といったイエスの慈悲に満ちた行ないやことばが、人びとの批判を呼び起こす。しかしイエスはその慈悲深い接近を非常にそっけなく弁護する。「医者が必要とするのは、丈夫なひとではなく病人である」（マコ二7）、「人の子は、失われたものを探して救うために来たのである」（ルカ一九10）、「私は、イスラエルの家の失われた羊のところ遣された」（マタ一五24）。同時代の宗教的指導者たちに、徴税人や娼婦たちのほうが彼らより先に神の国に入るだろう、なぜなら「あなたたちは後で考え直すことをしなかった」からだ（マタ二一31、32）と語るのである。

イエスの生きた時代には、次の三種類の人びとが罪人とみなされた。その第一は、悔い改めと希望により神に近づくことができるユダヤ人たちであった。それゆえに彼らは、父の慈悲にすがることが可能であった。第二は、悔い改めて、それが聞き届けられるとは限らない非ユ

ダヤ、異教徒の罪人たちで、彼らはそれゆえに神の恩寵の届かないところにいると見なされた。第三の罪人は、異教徒のようになったユダヤ人たちで、彼らは悔い改めも、願いが聞き届けられる希望もなかった。実生活上の意図のために、彼らは皆毛嫌いされ、社会から疎外された。こうした集団の中には、羊飼いや娼婦、らい病患者、徴税人などが含まれていた。<sup>(97)</sup>しかし今、こうした人びとがイエスから良き知らせを聞くことになった。「私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」(マコ二17)。イエスは、この罪人の第三グループに属する中風を病む者に、「子よ、あなたの罪は赦される」(同二5)と、救いのことばをかけている。

福音は、イエスが示されたこの新しい発想をわれわれが理解する時のみ、良き知らせとして実感される。そのとき、イエスの神はもはやトーラー(律法)の神ではなく、慈悲の神、無限なる善の神、そして自らの弱さを認め、神に至る道を歩み始めた弱者たちにこのうえない忍耐を示す神(ロマ三25-26)となる。放蕩息子のとえ話から、われわれは、イエス・キリストの神の慈悲の深さ、そのあふれ出る愛の大きさを具体的に、わかりやすく知ることができる。「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走りよって首を抱き、接吻した」(ルカ一五20)。天の父はまさにこの地上の父親と同じである。そしてイエスもまた、全く同じである。

イエスは、ご自身と神の、罪人に対する態度を説明するために、いくつものたとえ話をもつて、彼を批判する者たちに反論<sup>(98)</sup>している。失われた羊のたとえ話や、失われたコインの話は不平を言う律法学者やファリサイ派の人びとに対して示されている(ルカ一五2)。二人の債務者のたとえ話は(同書七40)ファリサイ派のシモンに対して示されている。「医者が必要とするのは、丈夫なひとではなく病人である」ということばは(マコ二16)、その当時もとても敬虔な人びとであったファリサイ派の人々、宗教の専門家に反対して語られている。また、ファリサイ派の人と徴税人のたとえ話も、同じようにファリサイ派を否とする結論となっている(ルカ一八9)。イエスはいづれのたとえ話においても、彼が導入した新しい考え方、すなわち神は第一に罪びとたちの神なのであり、メシアはわれわれを負い目から解放する方、われわれが負う重い良心の呵責からわれわれを救い出す方であるという考え方を正当であると論じようとしている。

神の赦しは、限界というものを知らない。神の赦しは、「どうか待って下さい。きっと全部お返しします」(マタ一八26)と頼む、重い借金を背負った家来のたとえ話に見られるように、制限されないものである。そしてこの家来は赦され、32節にあるように彼が頼んだので、借金をすべて帳消しにしてもらうことができた。しかしわれわれは同時に、神のこの慈悲、赦しの意味を余すところなく理解しなければならぬ。神の慈悲や赦しは、決して自動的に、あるい

は、機械的に与えられるものではない。この授受の底には、悪をおこなう者とその被害を受ける者との関係が意識されている。人は神に赦しを求めるにあたり、神に向かつてみずからの恥ずべき過ち、あるいは苦境について正直に説明をおこなわなければならない。他方、自らを正しいと思う者、つまり何の罪も犯していないために悔い改めを必要としないと考える者は、赦しを求める必要を何ら感じないかもしれない。不幸なことに彼らは思い違いをし、自らを欺いているに過ぎない。彼の目には真の状況が何も見えていないだけのことである。

ルカによる福音書の第一八章9～14節に示されたたとえ話に登場するファリサイ派の人は、錯覚しているのである。彼は自分では清らかに生きていると判断しても、実はきわめて心の冷たい生き方をしているわけであり、「律法の中でもっとも重要な正義、慈悲、誠実をないがしろにしている」(マタ二三23)のである。言いかえれば、彼は自分で気付かないだけで、実は罪びとなのである。彼は、自分には赦しを求める理由など何もないと思っている。そうした思いが心にあるから、赦しを求めようもしないわけであるから、それゆえに赦しを受けることもない。神はわれわれを赦してください。そして神はつねに、われわれを赦そうと思っている。しかし罪びとはそれに気付かず、赦しを求めようとはしない。罪人は、赦しを受ける用意がなければならない。その用意がなければ、赦しが行われることはない。そして神と罪びとの間の傷ついた関係は修復されないままとなる。神は慈悲にあふれた方である。しかし甘やか

すぎることはない。われわれが自分を罪びとであると認める時、すなわち徴税人のように（当時、彼らは罪びととされていた）自分の胸を打ち、「神さま、罪びとの私を憐れんで下さい」（ルカ一八13）と願う時、われわれは、完全な赦しと、神の国がすでにわれわれの心の中に居を構えたということを確信するのである。

この父の無限の赦しは、イエス自身が彼の処刑にたずさわった者たちに限りない赦しを与えた時（ルカ二三34）、すなわち自分自身を彼らの手に委ねた時（マタ二六52〜54、ヨハ一八8〜11）、歴史上の事実となった。イエスは、自分の生命が人びとに、罪びとたちに与えられ、それによって全ての人が贖われるということを知っていた（マコ一〇45）。イエスはまた、罪ある者の苦悩を自分の上に引き受け、神の赦しを求めて祈りを献げた。神はこれを聞き届け、世界と和解されたのである（一ペト一18、ロマ五8〜10、使八30〜35、ヘブ九15、28、黙五9、一コリ六20、七23）。このイエスのうちにこそ、愛はすべてを赦すという完全な真理が宿っている（一コリ一三4〜7）。

こうしたことすべては真実のことなので、われわれは、主の祈りで願う通り、自信をもって神の赦しを願うことができる。われわれは、イエスを通じて、われわれの嘆願が聞き届けられると知っているのである。

わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように

この嘆願の後半部分では、神の赦しを得るためのある種の条件が示されているかに見える。というのも、マタイによる福音書では「私たちも……赦しましたように」と述べられ、ルカによる福音書にも「私たちも……赦しますから」という表現が置かれているからである。マタイはその相関関係を強調する。そこで主の祈りの最後の部分で次のように言葉を加えている。「もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」(マタ六14-15)。これはある種の神との交渉、契約なのであるか？ しかしそうすると、神が見返りに何かを求めているかのようにふるまったファリサイの生き方を奨励していることになるのではなかろうか？ しかしそのような条件づけはイエスの教えられたことではない。イエスによって教えられたのは、無限の恩恵であり、利己的な動機、思惑から完全に独立した行いなのであるから。

マタイによる福音書の一八章23-36節に、重い借金を背負った家来の話が取り上げられてい

る。主人に重い借金の返済を待ってくれるよう願って、借金を帳消しにしてもらったという筋の話であるが、このたとえがわれわれに正しい方向を示している。この家来は、赦された後で、自分にわずかな借金をしている仲間を赦さなかった。この成り行きを耳にした主人はこの家来を呼びつけて言った。「不屈きな家来だ。おまえが頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか」(マタ一八32-33)。この教訓はきわめて明瞭である。もしわれわれが無限の赦しを求め、何の条件も留保もなく、その赦しを得られるのであれば、われわれもまた、われわれに無限の赦しを求める人に、その通りの赦しを施さなければならぬ。われわれの父が憐れみ深いように、われわれも憐れみ深い者とならなければならない(ルカ六36)。われわれは七の七〇倍も、すなわち限りなく、赦さなければならぬのである(マタ一八22)。なぜなら、神がそのように赦すからである。

ゆえに、ここには商取引はなく、紐つきはない。われわれは単に、神に、そして隣人に対して、同じ態度で接するようにと期待されているだけである。これは、イエス・キリストによってわれわれに伝えられている神の体験の新しい側面である。われわれは、一方を神に、他方を隣人にといった具合に、二様の態度を使い分けることはできない。いずれも一つの動機、すなわち愛によって、おこなわなければならない。「他者」を愛するということは神に出会うとい

うことであり、神を愛するということは隣人を愛するというものである。なぜなら「目に見え  
る兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない」(一ヨハ四20)からである。  
隣人と和解せずして神を敬うというのは、偶像崇拜である(マタ五23-24)。パウロはわれわ  
れに基本的な戒めを思い出させる。「主があなたがたを赦して下さったように、あなたがたも  
同じようにしなさい」(コロ三12)。

こうしてわれわれは、イエスの教えを完全に理解できたことになる。彼は「赦しなさい。そ  
うすれば、あなたがたも赦される」(ルカ六37)といい、「あなたがたは、自分の量る秤で量り  
与えられる」(マタ七2)と教えている。イエスはつまり、こう語っているのである。もしわ  
れわれが隣人を百パーセント赦していないなら、それは、われわれが父の赦しを十分に求めて  
いないしるしであり、かくしてわれわれは神の無限の赦しを受けることができないものとなる  
ということである。もしわれわれが、自分の罪や負い目に対する赦しの根源的な体験を本当に  
持っていれば、そして罪深いわれわれの人生に働く神の慈しみを本当に感じていれば、その時  
は、われわれは自ずと他人を限りなく、留保なく、そして屈託なく赦すようにさせられるはず  
である。ここに至福がある。「憐れみ深い人びとは幸いである。その人たちは憐れみを受ける」  
(マタ五7)。歴史が終る時、そしてこの世の生が閉じる時、慈悲の行いだけが数えられる。わ  
れわれの救いも、破滅も、われわれの行い次第である(同二五31-46)。隣人に赦しを与えよ

うとしない者に、神の赦しを求める権利はない。

最後に、次のことを述べておきたい。主の祈りの先の嘆願にこめられていたように、この嘆願も、社会的側面を持つているといふことである。<sup>(99)</sup>われわれの誰もが、罪びとの共同体の一人である。われわれはみな、神に負い目を負い、兄弟姉妹に負い目を持って生きている。われわれの共同体、社会の生命を支えるパンは、赦しであり、相互に慈しみを示すことである。もしこれが欠けているなら、破れた絆は修復不能といふことになる。神の赦しは、最も高い天との垂直の交わりを再構築する。われわれがわれわれに悪をなした者を赦すことは、われわれの水平の交わりを繕い、これを再構築することなのである。和解の成立した世界には、繁栄がもたらされ、神の国が実現される。そしてわれわれは、神の慈悲の虹の下に生きるのである。これらはすべて、われわれが唱える「私たちの負い目を赦して下さい。私たちも自分に負い目のある人を赦しましたように」という言葉の中に包み込まれている。